

東ティモールプロジェクト形成調査における参加型開発手法の活用

- ◇ AI (Appreciative Inquiry)
- ◇ PRA/PLA
- ◇ PCM
- ◇ KJ 法

JANARD では過去3年間の連続研修会の中で上記4つの手法を勉強してきたが、今回のプロジェクト形成調査に当たり、上記の代表的な開発手法を自由に組み合わせて使用してみた。

プロジェクト調査前

- AI による団員の能力、専門知識の確認
- KJ 法による調査に期待することの確認とまとめ

1次調査（東ティモール各地の訪問）（2005.1.13～27）

「本日のびっくり」

東ティモール各県を回る全旅程を PRA というところの Transectoral Walk と位置づける。

AI の Discover ステージによる現状把握と現状に対してどのような活動が考えられるかを洗い出す Dream ステージを実施。

毎日さまざまな現場を見て回るが、夕食後集まってその日の印象を、「本日のびっくり」として出し合った。団員はそれぞれ経験と専門を持っているので同じ者を見てもいろいろな視点があるので興味深い発見があった。これは必ず毎日印象が新鮮なうちに行った。多少情報が曖昧なことも出し合い、後日情報を入力することにする。AI では可能性のみに着目するのが原則だが、今回は、問題点も含めた Discovery とした。

この時点で、さまざまな発見を語り合ううちに自然とどのようなプロジェクトをしたいかという Dream のステージにまで発

展していくことも多かった。

Discover の総括

地方の視察を終え、首都に戻ってきたところで、半日のワークショップを実施。毎日の Discover を総括し、各項目をカードに書き込み、KJ 法によりカテゴリー分けをする。

その後、Discover した事柄を Dream につなげていく。この段階では、資金や人的資源等の制限を考えないで、自由に発想していくのがポイントである。Dream を出し合う中で、「それは現実的には無理だ」という発言は禁句とした。（別紙）

プロジェクトの選択

一次調査は Discover と Dream を挙げ、その中で、JANARD の専門性や特徴、方針、さらに現実的な予算や人員等を勘案し、仮に植林に関するアドボカシーを中心とする「植林プロモーションプロジェクト」を選び、そのために必要な投入を検証したとこ

ろで終了。

「三種の神器」の検証

おまけとして、調査旅行の間に各地の役人や農民等から必ず聞かれる「3つの不足」を検証した。3つとは、

- ✓ Irrigation がないから米ができない
- ✓ 今は何よりも Food Security が必要だ
- ✓ 東ティモールは Transportation が発達していないから食料や物資が行き渡らない

JANARD メンバーは上記に関して問題はもっと別のところにあると直感的に感じているが、相手の言い分も含めて 「I agree」と「But...」の二つの段階に分けて検証した。その結果やはり問題はもっと根深く、上記3つを解決するにはより包括的なアプローチが必要であることが論理的にわかった(別紙)。ただし、これをどうやって現地の政府や人々にわかってもらえるかが大きな課題となった。

第2次調査 (2005.2.13~22)

第二次調査は第一次調査の結果を受け、植林プロジェクトをさらに詰めるために行った。

今回は主として PCM を使った。(日本人調査団に加え、現地案内人の Lito 氏も参加したため言語は英語で行った)

関係者分析

ステイクホルダーを自由に出し合って、その後 KJ 法によりカテゴライズしたところが一般の PCM とはひと味違うところ。

中心問題を仮決め “Poverty”に落ち着いてしまった。これは問題があまりにも広すぎて先に進めないことを解説したが、なかなか納得してもらえなかったので、とりあえず、「貧困」を中心問題に据えて試しに検証してみた。ほとんど Poverty Assessment 状態だ。

問題分析

直接原因として「Lack of transportation」「Poor food production」「Lack of education」「Lack of farming skills」「Lack of water」などがあがった。そのうち、「Transportation」

をとりあげ、さらに問題を追究してみた。この時点でやっと、「貧困」を中心問題とするとはなしが広がりすぎることのコンセンサスができた。

さらに、18日の現地 NGO や政府関係者を招いてのワークショップにこの問題分析を取り入れ、検証してもらい、問題の深さへの理解の足がかりとしてみようということになった。

また、ここに来て中心問題を「Lack of food」と変更することに合意。この過程で PRA の Pair-wise ranking を適用してみた。

目的分析

問題分析を経てあるべき姿を分析した。ここでさまざまなアプローチが浮上したが、JANARD としては、植林プロジェクトを選択した。

PDM の作成

最終的なプロジェクト案を構築するため、プログラム・デザイン・マトリックス(PDM)を作成した(別紙)。